

日中両語における文脈指示詞に関する体系的な研究

陳, 海濤

<https://hdl.handle.net/2324/1831407>

出版情報 : Kyushu University, 2017, 博士 (芸術工学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 陳海濤

論 文 名 : 日中両語における文脈指示詞に関する体系的研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 約

本論文では、日中両語における文脈指示詞に関する体系的研究である。

世界中の言語は、どの言語も指示詞を必ず持っている。中国語の指示詞において、近称“这”と遠称“那”という2系列の体系を持っている。一方、日本語の場合はもっと複雑で、近称コ・中称ソ・遠称アという三系列を持っている。日中両語の指示詞は一对一の対応関係ではなく、複雑な対応関係を見せている。日本語における「コ・ソ・ア」指示詞と中国語における“这”、“那”指示詞の使い分けにおいて、ずれがあり、それぞれの機能も異なっている。それは両語における指示詞の体系が異なっているからである。

指示詞の使用法を究明するには、話し手が指示対象に対する知識の状態(黒田1979、田窪・金水1996など)という二次的な用法を追求すると、確実に彼らの説は説明できない例文がある。よって、指示詞の使用法の研究において、より抜本的な研究方法の提案が望まれる。

中国語においても、日本語においても、指示詞は無意識のうちに、使用される。言語使用の裏において、発話者の心的メカニズムが潜んでいると考えられる。言語における発話者の心的メカニズムは言語の使用ルールと直接的に関連している。従って、日中両語における指示詞の機能や使用法における相違の根本的な要因はそれぞれ発話者が持っている認知モード(心的メカニズム)が異なっているということである。つまり、指示詞の使用法の根本的な決め手は言語使用ルールの裏における話し手の心的メカニズムであると考えられる。

本論では、日中両語の文脈指示詞を研究対象として取り上げる。認知言語学というアプローチを用い、日中両言語における文脈指示詞に焦点をあてて、両語における指示詞の認知体系を究明した。つまり、発話者が指示詞を使用する際、どのような認知モデルをもち、指示詞を使い分けているのかという言語の裏にある心的モニター構造を明らかにした。また、話し手が指示詞を使用する際、どのような影響要素が働くかも究明した。

Diessel(1999:7)の説に従うと、指示詞の使用法において、現場指示が一番基本的な用法であり、一般的であるということである。従って、本論では、両言語における現場指示の基本的な使い方を明示する。本論では、コ系は「話し手にとって近いと認識している」。ソ系は「話し手にとって遠いと認識している」。ア系は「話し手にとって近くないと認識している」という基本的な基準を定めた。中国語の場合、先行研究に従い、“这”は「話し手にとって近い」、「那」は「話し手にとって遠い」という基準を策定した。さらに、現場指示における「遠近」に対する認識はどのように文脈指示において、どのように適用されるかを究明した。

指示詞の使用法において、下記の結論を導いた。

コ系指示詞の根本的な使用法は話し手が指示対象に対する知識量と関わっている。話し手が指示対象に対して知識量が最大に持っている場合、コ系指示詞しか使用できない。知識量が減るとともに、ソ系指示詞の使用容認度が高くなる。話し手が指示対象に対して知識を持っていない場合、ソ系指示詞しか使用できない。ある程度の知識量を持っている場合、コ系・ソ系指示詞両方とも使用できる。文脈レベルで要求される知識量を持つ場合、コ系・ソ系指示詞両方とも使用できる。ア系文脈指示使用規則は話し手の文脈レベルで要求される知識に基づき、共

有知識を要求するということである。共有知識を持っていない、もしくは、聞き手の知識を想定しないとした場合には、ア系が使用された場合には、聞き手は、話し手と共有する知識を見出すことを止める。

また、指示詞の使用法を分析する際、「聞き手の知識への配慮」を日本語の指示詞の意味に内包させるべきであると考えられる。よって、「聞き手の知識への配慮」は知識量と同じ役割を果たし、指示詞の使い分けに影響すると考えられる。日本語の文脈指示詞の使用において、知識量以外、指示対象が聞き手の領域に属する場合、聞き手の知識への配慮(ポライトネス)、知識の提供に関する責任(特定、一致性)などは指示詞の使い分けに影響する。

中国語における文脈指示詞の使用法は聞き手の知識への配慮や聞き手の領域などとは関係なく、使用される。中国語の指示詞は、我々(話し手と聞き手)の領域を形成しやすい。中国語の指示詞の使用範囲は自由度が高い。中国語における文脈指示詞は時空に関するものを指示する際、現場に依存性が高い。それ以外は話し手の主観的な関与が働くことが多い。つまり、話し手は指示詞の使用により、指示詞との心理上の距離を示す。

日中両語における文脈指示用法におけるずれはそれぞれ両言語における心的モデルが異なっていることに求められると考えられる。すなわち、それぞれは「遠近」に対する認識が異なっている。